

## 郊外に浄化される〈蜜蜂〉

— 岩野泡鳴「蜜蜂の家」

鷲 崎 秀 一

岩野泡鳴の作品に「蜜蜂の家」(『雄弁』、大正8・4)という小説がある。二ヶ月後に上梓される著作集『征服被征服』(大正8・6、春陽堂)に収められてはいるものの、「本年度になつては、大抵毎月二つ乃至三つ位の割合で創作を発表した」と評されるほどの多作であったためか、初出時は埋没してしまい、泡鳴研究の中でも注目度は高くない作品であった。<sup>2)</sup>

だが、本作は、泡鳴文学を研究するにあたり、多くの位相上で、重要な位置を占めているように思われる。一つは、〈蜜蜂〉を題材にしているという点である。

泡鳴は大阪在住時代(明治44・4―大正元・9)に養蜂に関心をもち、帰京した後も蜜蜂を飼育し続けたことは、当時から知られていた。まず、泡鳴自身が「詩人の養蜂日記」(大正2)等<sup>3)</sup>で、その飼育の様子や観察してきたことを断続的に発表しており、作家の私生活を報じる記事においても「泡鳴の養蜂熱」が話題とされ

ることがあった。「蜜蜂の家」は、泡鳴が多くの時間を共有してきた蜜蜂を、初めて本格的に題材とした小説であり、その養蜂経験をいかに文学的に昇華したかを窺わせる点で興味深い。むしろ、これまで組上に載せられることがなかったので、一度は検証されるべきであろう。

また、本作が大阪近郊を舞台にした作品であることも見逃せない。大阪を写した近代文学に優れたものがないことを憂いていた泡鳴が、「ぼんち」(『中央公論』、大正2・3)をもって、自らその第一人者になろうとしていたことは、すでに拙稿<sup>5)</sup>で確認している。「ぼんち」から時を経た「蜜蜂の家」では、大阪近郊はどのように写されているのか。その分析を試みることは、彼が遺した大阪文学の実態を解明する上でも重要であろう。とくに郊外を舞台としている点については、近代化が進む大阪の、さまざまな時代相が映り込んでいる可能性があり、文化史的にも価値を有する作品だと思われる。

ともあれ、作品が読まれてこなかった以上、まずは、どのよう

な作品であったのかを明らかにすることから始めなければならぬ。だが、初出時の同時代評が少なく、その端緒をつかむことが難しい。

作品分析の基本的な姿勢として、初出本文と、後に著作集に所収され、多少の異同もある本文は分けて考えられるべきだが、出版イベント<sup>(6)</sup>が開催されるほどに宣伝された『征服被征服』についてであれば、少ないながらも当時の声を拾うことができる。まずはそちらを足掛かりとせざるをえない。

そもそも『征服被征服』という著作集は、冒頭に付された「はしがき」<sup>(7)</sup>にもあるとおり、別々の時期に発表された〈耕次〉と〈澄子〉の四つの物語を、作品内の出来事に合わせて整理し、一つの長編として再提示されたものである。そこに「蜜蜂の家」は、「二の巻」として収録されている。当時の新聞雑誌に掲載された広告には、次のとおりある。

・円熟妙境に達せる著者が最近の四部小説にして、全巻に溢る、ものは生々しき近代男女の恋愛生活である。二個の男女が愛に始まつて遂に離婚に終るまでの止み難き愛の闘争は、泡鳴氏一流の一元描写に拠つて深刻切実に描破されてゐる。人間愛の真相を斯くまでに描ける作品は現文壇界で見ざる所、実に著者が近来の傑作。

〔東京朝日新聞〕、大正8・6・30

・(内容) ■征服被征服 ■蜜蜂の家 ■空気銃 ■離婚まで

今や円熟妙境に達せる著者が最近の四部小説也。近代的男

女の恋愛生活を描き遂に離婚に終る止み難き愛の闘争を活写せる雄編にして其一元の内面描写は怖しき迄に人間愛の真相を描破して余す所なし。文壇稀にみるの傑作。

〔中央文学〕および『新小説』、大正8・6

どちらの広告文にも見えるのが「近代男女の恋愛生活」や「愛の闘争」、また「一元描写」であり、いずれも泡鳴文学を語る上で不可欠な用語である。いわば、『征服被征服』は、泡鳴文学の正統に位置し、現在地を窺わせる著作集として売り出されている。実際に、同時代の批評家である加藤朝鳥も、そのようにとらえていた節が見受けられる。

その恋愛観芸術観人生観等を真正面から取り扱つて居ると云ふ意味で、此の『征服被征服』は同じ作者の前期の代表作であるところの『断橋』『放浪』『発展』等とともに之を而に尊重すべきユニークなものである。(略) 征服被征服と云ふ考へかたは、安つばい男女同権論よりははるかに徹底した思想的根拠を持つてゐる。此の点はおそらく『征服被征服』と云ふ一小説が現代社会の男女観に対して何物かを暗示すべき一使命であらう。<sup>(8)</sup>

この評は、当然ながら「蜜蜂の家」にも該当する点がある。ただ、これはあくまで『征服被征服』の文脈にて言及されたもので、「蜜蜂の家」の読まれ方を把握する材料としては物足りない。もとより、泡鳴全集の解説では、「当初はこの四編をまとめる予定ではなかったよう(略)」、「征服被征服」「空気銃」「離婚まで」の三編

を『征服被征服』の書名で刊行する予定であったと思われる<sup>(9)</sup>とも指摘されており、執筆時は『征服被征服』という枠組みさえ意識されていなかった可能性もある。やはり、まずは虚心に、「蜜蜂の家」の初出本文に臨む必要があるろう。

## 二

先に述べたとおり、「蜜蜂の家」についてはほぼ手付かずの研究状況であるが、昭和二十四年に刊行された『征服被征服 岩野泡鳴選集 第二巻』には、本作に関する言及があり、次のようなあらすじが付されている。

澄子が一ヶ月許り遅れて西下し、池田に家を持つ段取りになつてからが、次ぎの『蜜蜂の家』の作品一篇に扱はれてゐる。この作の中では、澄子が耕次の記者生活にからまつて、社会的にも働かうとするのであるが、社に於ける不愉快な気分と、澄子の案外粗笨な性質に対する失望とで、創作の仕事が出来なくなり、樺太事業の失敗以来、暫く潜んでゐた『実業欲』が、その生活の空虚さの中に、一味の緊張を導いた、そして端なくも蜜蜂の飼養研究に身が入るやうになり、澄子にか、づらふよりか、蜂の生活を人間並みに研究し、果てはそれを事業化したくなるといふ筋。描写も部分的に光つてるところがあるが、殊に、作の終りのところで『つがひの鶴』を大空に眺めながら、女に二本の指を出して、禅僧のやうな無言の微笑を

交はすところなど、見事なものである。<sup>(10)</sup>

この「筋」により、大まかな流れはつかむことができる。ただし、このまとめ方には大きな瑕疵がある。というのも、「蜜蜂の家」は、いわゆる〈愛の争闘〉がありながらも、最終的には耕次と澄子とが和解して結ばれる話なのである。なにゆえ、この結末が省略されたのかは分からないが、その原因として考えられるのは、まさに「離婚まで」が描かれる『征服被征服』の大きな文脈に引きずられた可能性であろうか。かような例もあるので、一つの作品に対し、細部と全体に目配りしつつ読んでいく必要があるろう。

「蜜蜂の家」は「一」から「八」の章によって成り立っている。冒頭では次のとおり、耕次の目線にて、澄子との関係が冷めつつあることが語られている。

『……………目かけにでもしてそとへ囲つて置くには、却つて一般の目かけなどとは違つて、波瀾もあり話し相手にもなつて、たま／＼会ふには手ごたへがあつて面白いかも知れぬ。で、長く一緒に住むべき女ではなかつたことを、耕次は近ごろになつてやつと発見したのであつた。<sup>(11)</sup>

耕次には本妻がいるので、澄子はいわば不倫相手なわけだが、その澄子とも良好な関係にはないことが仄めかされている。周知のとおり、泡鳴は自らの私生活を赤裸々にメディアで語り、実人生での経験と創作活動とは不即不離であるべきという主張を盛んに行つてきた。澄子のモデルである遠藤清も婦人活動家として知られた存在で、その著書『愛の争闘』（大正4・11、米倉書店）に

は、本作中に見えるエピソードも確認できる。ゆえに、本作の耕次を、作者泡鳴に重ねてしまうことは、やむをえない面もあるのだが、だからといって、本作が、単に作者の身辺雑記をもとにした小説という認識では身も蓋もない。いうまでもなく、作品である以上、その独立性は担保されねばならない。泡鳴自身も、本作執筆前から「これ（※「空気銃」）の主人公耕次を作者その物だと見て中村星湖氏や前田晁氏が作者の好悪で材料が左右されたかのやうに評したのは、評者における早合点であつた」と述べているほか、「作者がその作に割愛するところがあるのは既に批判が添つてるのである。従つて、一元描写に於いても作者は——たとへ自伝的にも——作中人物とは同一になれない」とも述べている。また、批評家だけでなく、同時代の読者についても「主人公を作者自身に、そしてその相手の女を作者の妻に見てしまった馬鹿な読者が多かったのは困りました」との感想も漏らしており、耕次と澄子の物語として読むべきなのであろう。

冒頭部の後、作品は、次のとおり続く。

渠は先づかの女を残して大阪の或新聞社に雇はれて来た。そしてかの女が女中の老婆を伴つて東京を引き上げて来たのは——これも経済上の都合で——一ヶ月ばかりもあとのことであつた。

こうして、大阪の玄関口である「梅田の停車場」に、澄子たちを迎えに行くのが「一」である。彼女は、「自分の絹かうもり傘と共に、こちらの棄てたつもりで残して来たところの縹子まがひのか

うもりと桜の安ステキ」を「大切さうにかかへてゐた」とされている。なぜ「傘」と「ステキ」に焦点が当てられているのか、些細な描写ではあるが、「一」の中で強調されたことゆえ、念のため、後続の文章には留意しておきたい。

続く「二」では、彼らが暮らす町について語られる。

大阪から五里を離れた池田の室町は、耕次の勤める新聞社に関係のある電軌会社が経営する邸宅地である。その上、そこから電車はたつた三十分で大阪へ達するので、渠は同会社のすすめによつてその碁盤の目並みに殆ど同じやうな家が立て込んで、その一つを借りて住むことにしたのだ。

二階にあがつて見ると、左り方には、宝塚行きの電車軌道で池田の新局街と旧市街とを一直線に横に仕切つて、そのさきの旧市街を越えて、池田山が手近く見える。また右の室の窓に倚ると、六甲山の眺めもさう遠くない。

ここにある「池田の室町」とは大阪府北部に位置する池田市室町のことであり、「電軌会社が経営する邸宅地」というのも、現阪急の母体にあたる箕面有馬電気軌道株式会社が開発した分譲住宅地のことである。かように、当時鉄道を起点としたまちづくりを仕掛け、新生活を推進していたのが同社の小林一三<sup>15</sup>であり、作中には、その小林に対し、「何万と云ふかねを、損益の問題はあつまわしとして、大きく人にゆだねて経営させることにしたその本人の、大胆勇猛の企てを耕次は自分の考へに比して買つてゐる」と、好意的に言及する場面も見受けられる。

さて、「池田の室町」であるが、本作がこの地を舞台としていることは、どう読み解けばよいのであろうか。当時の文献には、「池田の室町」に関して、次のような説明がある。

■池田町字室町 停留所前にある新市街地なり、這は箕有電鉄会社の所有地を拓き社費を以て設計したる新街巷にして、用水としては極めて清涼なる井水を得、郊外の住宅に最も適当なる理想的新市街なり、殊に空気新鮮、夏時は涼しく、冬季は暖なり、是れ正に此住宅の特色なり

〔箕面有馬電鉄沿線遊覧案内〕(明治43・7、咬業社)  
池田、桜井、豊井<sup>トヨイ</sup>の三ヶ所に各数万坪の住宅経営地を相し、きわめて衛生的にして且つ経済的なる模範家屋数百戸を建に設し、煙に悩める大阪人の移住を歓迎し、中流以上の士人が郊外生活の最上地として我もくと移住せし

(近藤乙吉『事業と人物』(大正6・9、玉木源郎))  
つまり、彼らが住んでいた「池田の室町」は、よくもわるくも歴史文化が積み重なっている大阪の中心部ではなく、当時急速に増加していた会社員とその家族向けに開発された、新興の郊外住宅地なのであった。耕次たちが暮らすのは、池田の中でもいわゆる「新市街」であり、当時としては最先端の暮らしを送ることが可能な地域である。しかも、引用中にもあるとおり、景色も空気もよく、したがって現地に着いた澄子は「叫ぶやうに、「いいところですね」と喜んだ」とされている。

東京をいやな記念ばかりのちまただと云つて嫌つてるため

に、こちらの大阪行きには一も二もなく賛成したかの女は、矢張り、同じ意味をも含めてだらう、天然好きの得意を叫ぶやうに、「いいところすね」と喜んだ。

このように、澄子は池田の地に大いに満足を示している。しかし、その地域に住む人々については、雑駁に「大阪人」としてとらえ、あまり好意的ではない。もとより都市における人間関係に嫌気がさしているということもあるのだが、「説明したけれども、かの女の先入見には受け容れられたようすもなかった」ともあり、根深いものがあることも窺わせる。むろん、池田というまち自体が、江戸期より商業都市として栄えてきた経緯もあって、当時はまだ、まちの機能が旧市街に集中していたであろうし、代々池田に暮らす住民も少なくなかったことは想像に難くない。新住民の多くが府外から移住してきたわけでもない。澄子にとっては、いかに郊外の新興住宅地といえど、大阪を感じさせる場所には違いなかったであろうが、見方を変えれば、本作が、たとえ時代の最先端を謳われるまちであっても、ただちに近代的な都市型社会が成立したわけではないことを示していたとも言えよう。

一方で、「かみがた生まれ」とされる耕次の「大阪人」観は異なっており、たとえば、彼は、「一般に、大阪人には金や女としかないと云はれる」ことを否定的にとらえておらず、むしろその露骨さが実社会においては力強い生の証になるととらえている。この「大阪人」への肯定感こそが、やがて彼を、養蜂事業へと邁進させる原動力になっていくのだが、澄子のほうは「不快と見える空気

の中に生活する人間には、なほ更ら近づかうとしなかつた」とさ  
れ、温度差は大きい。そのためにも彼女は、「天然好き」になっ  
ているということである。

さらに、この「天然」についても意見が分かれており、新天地で、  
新たな人生を送るべく東京から呼び寄せたにもかかわらず、もは  
や二人の関係は修復不能に映るほど、暗雲が垂れ込めている。

『あなたの好きだと云ふ自然は単純な天然のことで、少くとも  
人間味が生じてゐません。』

『だから、高尚なのでしょう』と、かの女はぶり／＼して而も  
得意さうに答へた。『人間ばなれがしてゐて?』

『単純過ぎますよ』と、その時和らかにだがこちらから投げ与  
へた言葉を思ひ出すさへ面白くなかつた。

なお、本作とほぼ同時期の作品に、芥川龍之介の「秋」(『中央公  
論』、大正9・4)があるが、「秋」のヒロインの信子も、澄子と同  
じく、夫の転勤に伴って「大阪の郊外」に移住し、寂しい思いをし  
ていた。<sup>47)</sup> 同時期に、近接した地域で、似た風景が映し出されていた  
となると、両作とも、近代的なまちづくりによって生じた影の部  
分を焦点化していた意味合いもあったように感じられる。

そしてゆふぐれの定刻に耕次が池田停留所で電車を下りて  
来るのを、天然風景の一部で、もあるかのやうにして、か  
の女はいつも家の門に出て寂しさうに待つてゐた。そして、  
『斯ういふところへ来てゐては、もう、婆アやだつて、わたし  
だつて、あなたばかりが手頼りですから、ね』と云つた。

『……』渠は或人が強情な女を服従させるには山へつれて行  
くに限ると云つたことを思ひ出した。寂しがらせて、素直な  
依頼心を起すやうにするからであらう。こちらに對する澄子  
の態度も可なり一変したのである。

こうして「二」は、澄子が寂しさとともに素直さを一時的に回復  
させる場面で終わる。

ところで、この引用中には、「渠は或人が強情な女を服従させる  
には山へつれて行くに限ると云つたことを思ひ出した。」という一  
文が見えるが、もちろんこれは、大阪に呼び寄せたことを「山へつ  
れていく」という表現で、比喩的に語つたものであるが、この後、  
実際に池田山へ連れていく場面もあるので、その対応関係にも注  
目しておきたい。

## 三

つづく「三」では、耕次が、新聞社の雑務に追われる様子が描か  
れている。彼が職場でやっかみを受けつつ仕事をする一方で、澄  
子は「頻りに風景あさりをし」た日々を送っている。ようやく二人  
の新生活も落ち着くかに見えたが、過去の恋愛を蒸し返して口論  
となつてしまい、「ちよつと納まつたやうであつた衝突がまたつゞ  
き初めた」。職場の人間と澄子とを引き合わせたときには、揉め事  
も起きてしまう。

不如意な現実と、先にも触れたとおり、大阪に来てから「金もう

け」を否定する気持ちが出来たことで、いよいよ副業へと向かう様が描かれるのが「四」である。

ある日の散歩にて、耕次たちはたまたま「蜂飼ひの家」を見かける。もとより耕次には養蜂への関心があったが、澄子の勧めに後押しされ、彼は蜜蜂の一群を購入する。

かの女にはそれも人間離れのした天然であらうが、生き物ならすべて好きな耕次はその生き物なる故を以つて蜂の生活をも人間のそれのやうに見た。産むものが一匹、産ませるものが少数あつて、あとはすべて男性の変形なる中性の働き蜂ばかりになつて、この群が力を合はせて一つの生活を整然として経営してゐる。

これを天然と見ようが、人間的としようが、この少しも動かせない生きた事実を見て楽しめるところに、二人は両方面から期せずして趣味の一致ができた。

この引用中にもあるとおり、蜜蜂は、人間界にも通じるような、特殊な社会生活を営む昆虫である。念のため、蜜蜂の生態について、当時の文献ではどのように記述されていたかを確認しておく。本作と同年に出版された小関貞次『高等小学理科教授資料集成』（大正8・11、隆文館図書）には、次のとおりある。

彼等の一群は其の数凡そ一万以上二、三万相集りて一の大なる巢を造り、整然たる社会的共同生活を営むものにして、其の組織の発達せる、其の生活状態の巧妙なる真に驚嘆に値す。而して蜜蜂の社会は三種の蜂に分る。雌蜂・雄蜂及び働

蜂是なり。（略）

雌蜂は全蜂群の頭目にして常に巢中奥深く安居し専ら産卵をなす（略）

雄蜂は春日、雌蜂と共に空中に出で、交尾する外。徒食するのみなれば、秋に至りて働蜂に螫殺さる、か、自ら羽落ち体衰へて死するものなり。（略）

働蜂は雌蜂の変生せるものにして産卵することなし。

普通の一つの巢には一匹の雌蜂ありて、之に数十乃至千の雄蜂と数千乃至数万の働蜂あり。而して一群中に於て種々の労働に従ひ、職務を執るは独り此蜂のみにして、雌蜂を保護し、幼虫を養育し、腹部の環節の間より一種の蠟を分泌して巢を造り、常に蜜・花粉及び樹脂を採集して之を巢中に貯へて食料となす

他の同時代文献にも目を通して見たが、基本的な説明に、ほぼ相違点はなかった。近代以降、蜜蜂については、養蜂に関する専門書も出版されたため、作者泡鳴は、国内外の蜜蜂に関する書物<sup>(18)</sup>を読み漁っていた。その上、実際に飼養もしていたので、本作では、蜜蜂の生態が詳細に描写されている。

さきの一群はこちらへ来てからまた王台を四つ五つ拵らへたが、そのうち一番恰好の一つ残してあとを皆わざわざつぶして置いたら、その一つにやがて王が生まれて分封した。今ごろ分封させるのが既にそのもとをも子をも冬になつて滅亡に至らしめることになること云はれてゐたのだが、研究の為

めにやつて見た。で、箱が二つになつて来るが、そのいづれもの群がゆふがたの月見草に行つて来るかして、働き蜂は各々あの黄いろい花粉をたんまりとその両方の足につけて運んでゐる。たまには、灰白の花粉を運ぶのもあるのを見ると、どこかのクローバにも行つて来たらしい。

かような写真性に、一つの文学的価値を見てもよいと思われるが、さらにあえて、蜜蜂を題材とすることの同時代的意義を問うた場合、どうであらうか。

というのも、蜜蜂はその社会性ゆえに、古来より文学、とくに寓話の題材とされてきたと見る向きがある。明治期に専門誌『養蜂之友』を発刊した渡辺寛を父にもつ養蜂家の渡辺孝は、古今東西の蜂を題材とした文学作品を取り上げ、分析を試みた『ミツバチの文学誌』（平成9・5、筑摩書房）を上梓している。同書では、近代の「蜂」に関する同時代文脈も丁寧に浮かび上がらせていて参考となるが、たとえば、明治末には「蜂群革命論争」なるものが思想界で勃発していたことにも触れられている。

そもそもこのキッカケは、「養蜂之友」の明治四十五年三月号に東北大学の佐藤勝四郎が「蜂群革命論」という一文を書いたことだった。その要旨は、①ミツバチの社会で主導権を握っているのは働き蜂であつて女王蜂ではない、②だからミツバチの社会は共和政体であつて、君主国ではない、③したがつてわれわれは今後は蜂王（女王蜂）という名称はやめて、大蜂と呼ぼうではないか、という三点になる。

それだけなら別に何でもなかったかもしれないが、佐藤はその文末で最近の清（中国）の革命（一九一一年の辛亥革命）を引き合いに出し、「余数万の働き蜂を代表してここに蜂王の退位を迫り、共和政体たることを宣言す」と大見得を切ったことがたいへんな反発を招くことになった。（略）ただしに多くの論客がいつせいに批判を加え、佐藤は集中砲火を浴びることになった。

また同書では、泡鳴のこの論争への反応についても言及されている。このように蜜蜂に関する言説が、同時代の言論界で飛び交っていたことは注目に値する。

（※泡鳴は）『蜜蜂の話』の中でこの論争を取り上げ、ミツバチの社会を君主政体と見る旧来の考え方を「とんでもない見当違いである」とやつつけている。（略）君主制論も共和制論も、いずれも人間社会の政体概念をミツバチの社会に持ち込んだ擬人論であつて、正しくミツバチの社会の実態をとらえたものではないというわけである。

蜜蜂の擬人化ないし蜜蜂社会を媒介に、人間社会を語ろうとする発想が同時代に存在していたことは、本作を読む上でも留意しておく必要がある。

さらに同書では、明治末から大正初期にかけて「世界養蜂界空前の盛観」とうたったほどの種蜂熱が起きていたことにも触れられている。そして、それとは別に、当時の文学界、それも泡鳴に近いところで、蜜蜂に関する著作が注目を浴びていたことにも言



及されている。

『蜜蜂の生活』であるが、この書物はメーテルリンクが詩人、劇作家、思想家として華々しい文名をうたわれ、ヨーロッパの文壇でも地位が安定した一九〇一年に書かれた。(略)

世界的にも大きな反響を巻き起こし、彼が一九一一年にノーベル賞を受けた理由の一つに本書の執筆があるという。日本でもかなり注目されたらしく、私の手元にある訳書だけでも四冊あり、最初に出版されたのは大正五年で、上田敏が序文を書いているくらいである。

泡鳴がメーテルリンクに大いに刺激を受けていたことは、ここで確認するまでもない。泡鳴が作家生活において、繰り返し主張してきた「神秘的半獣主義」や「霊肉合致」、そして本作にもしばしば出てくる「征服」という用語のいずれもが、メーテルリンクの影響なしには存在しえないものである。むしろ、泡鳴はこの著書を批評的に読み、消化したことは、評論「蜜蜂の話」(『中央公論』、大正4・5)の中にも窺える。それゆえ、本作にて、耕次がことさら蜂を意識し、ときにその生息から奥深いものを看取したり、また発奮したりするのは、このようにいくつもの同時代文脈や背景が存在するためなのである。

子供のやうに自分を教訓するのでもないが、蜂のせつせといとなむ生活を見るにつけても、自分もつと奮発しなければならなかった。どうせ澄子とは尋常に家庭を持ってぬものとするれば、丁度自分が社に於いてわざ／＼好んで孤立してゐる

やうに、家に於いても寧ろ一本立ちになつてゐる方がよかつた。自分が北海道で受けて来た絶望と疲労とを最初に直して呉れたのはかの女であつたのだから、それはそれとしていつまでも感謝することにして置いて――。

かくして、今度こそ蜜蜂が二人の間を取り持つかに見えたが、その後は耕次の意識が蜜蜂に移つてしまい、澄子からの気移り(※耕次いうところの「流動的現実主義」)は顕わになる。なお、興味深いことに、この「四」において、澄子に関する記述量と蜂に関する記述量は、ほぼ同程度である。本作の特徴である一元描写は、当時からその不完全さが指摘されがちであつたが、かように視点人物のそのときどきの関心が、記述量という形で可視化されるので、表現効果として、かならずしも悪い面ばかりが強調されるものでもなかつたはずである。

こうして耕次は、仕事と私生活における緊張から逃避するやうに、ますます養蜂にのめりこんでいく。先の引用には「自分が北海道で受けてきた絶望と疲労とを最初に直して呉れたのはかの女であつた」と謝意を示す場面も見えるが、一方で、このときの耕次にとっては、「蜜蜂」こそが、まさにかつての「かの女」と同じ役割を果たしていることが分かる。

このように本作は、単に作者の記憶が再現された小説ではなく、さまざまなイメージが戦略的に重なる形で構成されているように思われるがどうか。というのも、次の「五」に至ると、その傾向が、さらに顕在化しているように感じられるのである。

## 四

あいかわらず澄子は、大阪の生活に馴染めないでいる。耕次も苛立ちが募り、おもわず声を荒げる日もあったが、「不断澄子のがつた声を責めながら、自分も亦もつと大きくそのとがり声になつて行く」ことを自覚しており、彼女と自分の姿が重なって見えている。また、日増しに悪化する状況を打破すべく、耕次が「まあ、蜂でもしつかり飼つて見ます。」と答えた際には、澄子の「連想の悪さうな顔つき」を見逃さず、解さないことへのもどかしさも吐露している。つまり、本作は、読者にも積極的に「連想」することを要請しているように思われるのである。

この「連想」を意識してみると、本作にはさまざまな形で、連想すべきことがあつたように感じられる。「五」においても二度挿入されている〈玉突き〉<sup>19)</sup>はどうか。本作では、耕次が頻繁に「室町倶楽部」に向き、玉突きに興じたことが描かれている。この玉突きは、次の記述をみると、やはり衝突を連想させる効果があつたように思えてならない。

自分のために自分の緊張連続的的的とが相衝突したのだと思つた。たとへば、他の或人に付いて云へば、本妻と目かけ、または目かけと目かけ同士が――。

本作では二人の関係は一進一退をたどり、きわめて不安定である。この「五」においても、澄子からの突然の流産が告げられた後、「かの女との間はそれから少し融和するやうになつた。が、婆アや

が今度は突然に帰京したいと云ひ出した。」とされ、まさに玉突きで、次の展開や問題が押し寄せている。

婆アやがいなくなった後、澄子はますます寂しい思いをするようになる。耕次は、「社へ新らしく這入つた婦人記者をどうかと云つて見た」り、子犬を連れてきたりと、あたかも女王蜂に尽くす働き蜂ながらの甲斐甲斐しさを見せる一方、彼の心境は次のように整理され、その立ち位置が明確にされている。

そして自分は矢つ張り自分の緊張を一番多く蜜蜂の研究に向け、そしてその緊張の連続を、云はば大阪流に澄子と玉突きの勝負とに向けた。現在に握れる生活の内容若しくは実質はただそこにだけあつて、これに外れないやうに努めるのをしつて自分はヤツと自分の存在を認めてゐた。

こうして「五」も結びに向かう。以下はその末部だが、ここには本作の読解の鍵となる重要な記述が挿入されている。

『あんた夫婦はあんたの飼ふてる蜜蜂のやうやさかい。』これは耕次に対して購買組合の主人が冷かし半分に云ひ出した言葉であつた。そしてこちらのいろんな内情を知らない人々は、皆でそれを繰り返すやうになつた。

『君は蜜蜂を飼つてなさるんですか』とも、大阪で名の出てる実業家や会社の重役などまでが不思議さうに聴いた。

『なアに、まだ研究中です』と答へた。そして渠は渠等の仕事に対しても内容と実質に於いては同格だと云ふ自信があつた。

『蜜蜂の家』といふことがさうして耕次の家の別名になつてしまつた。

このように示唆的な言葉がある以上、やはり蜜蜂や蜜蜂の家に関する連想も読者に要請していたと見るべきではないだろうか。そもそも泡鳴は、表象派で鳴らしたアーサー・シモンズの著作の訳者<sup>20)</sup>でもあり、詩的用法や象徴的表現に関する知識については、文壇でも一等地を抜く存在であつた。現に、『征服被征服』に収められている「空気銃」も、次のような記述をもつて結ばれている。

『当りました——反れました』は、考へて見ると、空気銃のみさんの呼び声ばかりではなかつた。耕次には一時当つたと思へた女房も、実は、反れてたのであつた。

むろん、作者泡鳴の業績を持ち出すまでもなく、本作は「六」以降においても、読みを促す要素に満ちている。

「六」では、澄子が文筆業の仕事を再開する場面から語り始められる。しかし、関係の不安定さはいかかわらず、また些細な事で他者とぶつかり、耕次に離別を勧める者まで現れる始末であつた。そんな折、室町神社の森に蜜蜂の分封群が現れる。この地域では、蜂を「福の神」として貴ぶところもある」ことが語られる。

耕次は、それを「迷信」と考へている節はあるものの、以降、二人の関係は好転するので、作品としては、この蜂群が実際に「福の神」として位置付けられていたことになる。

首尾よく蜂群を捕まえることに成功し、耕次はまた飼養を始め。この飼養は順調に進み、熊蜂が襲い掛かつてきたときは、「日

本の海軍がロシヤ艦隊に遭遇した最初の勇ましさと恐怖とはこんなものでなかつたかと思はれるやうな気持ちでいい」て、撃退したとされる。このような些細な挿話においても、可能なかぎり、イメージを膨らませようとする意識が看取されよう。

やがて、蜂に導かれるように、二人の物語は大きく動き出す。「七」は、以下のように始められる。

また、この頃は蜜蜂逃走の時期でもあるので、山の方からでもまたやつて来ないか知らんと思つたのが、ふと或日の出来ごころになつて、渠は自分から澄子を促して池田山へ登つて見る気になつた。かの女も喜んで従つて来た。

東京から持参した「かうもり傘」を手に、山に登つた澄子と耕次は、池田の市街が一望できる場所へと移動する。ただ、この時の耕次の視線に着目すると、彼は単に市街を眺めているのではなく、明らかに「そのさき」をとらえている。

市街がよく臨めるところがあつた。旧い方のをばかりでなく、そのさきのもだ——いや、そのまたずつとさきの伊丹あたりも可なりはつきりと。そして六甲山はその右手にそびえ列なつてる。いろ／＼な事業——恋をも籠めて——のけむりに曇つてる大阪市は、少し左り手にそれと分るだけにうす遠く。

さういふ風にこちらの眼界を広げてみると、横ながに走つてる箕面有馬の電車軌道は殆ど真ちかの眼下に在るやうだ。

彼が見ているものは、池田に隣接する伊丹とその背後に聳え立

つ六甲山、そして「いろ／＼な事業」と「恋」に煙る大阪市、さらに、そこに至るために敷設された「電車軌道」である。このように耕次は、現在地から「さき」を眼差した結果、自分たちが暮らす『蜜蜂の家』を、一番後に認識している。

新開室町の家々は、それぞれ小さくマチ箱のやうに仕切られてる。そのうち、正面の並びの川づつみに寄つた方に、自分らの『蜜蜂の家』もそれとゆび指された。

『ああ、いいこと！』

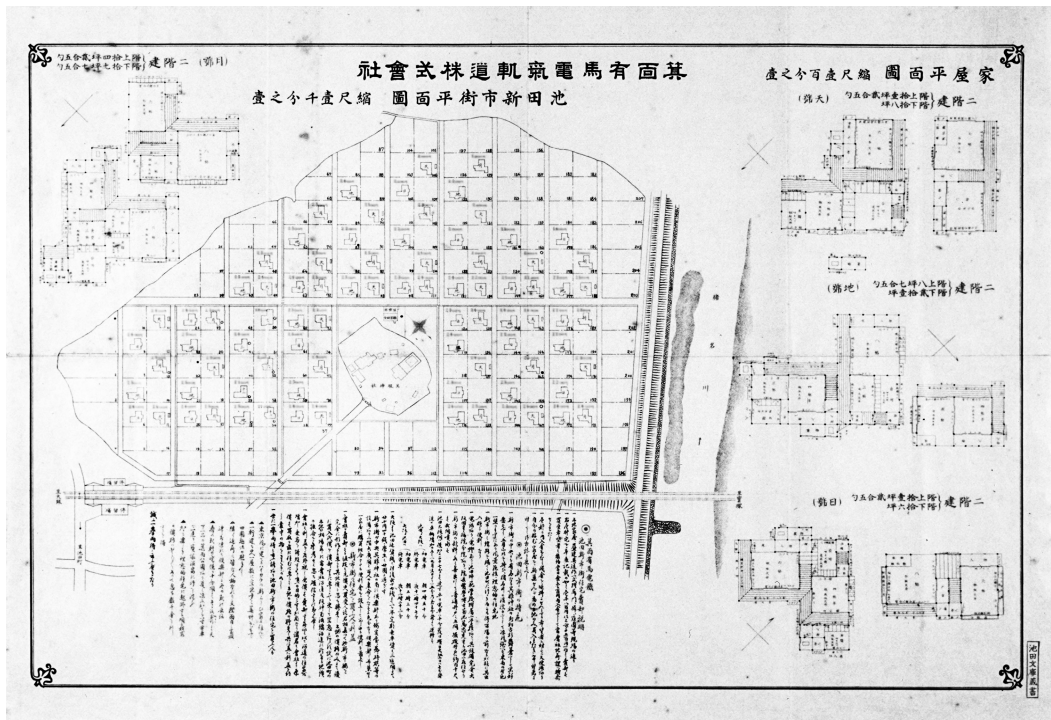
澄子が少し前にさう叫んだのであるが、それが聴えてゐなかつたかの如くして、耕次は改めて別に簡単に斯う尋ねた、

『どうだ、ね？』

『いいところです、わ——あなたは早くつれて来て下さらないんですもの！』

彼らの家が「蜜蜂の家」と呼ばれる所以は、先に見てきたとおり、物珍しい蜜蜂を飼育する家庭への揶揄と、二人の間柄があたかも蜜蜂のようであるとの見立てから付けられたものであった。山上に居る彼らの目には、この「蜜蜂の家」がどのように映つたのであろうか。

下の図版は、箕面有馬電気軌道株式会社が作成した「池田新市街平面図」である。郊外住宅地の開発自体が珍しい時代ゆえ、山上から見た二人の目には、おそらくこの図のように、新市街が浮かび上がって見えたことと思われる。しかも、「蜜蜂の家」を意識してこの新市街を眺めたとすれば、必然的に、あるものを連想させ



たのではないか。つまり、区画整理が行き届いた新市街は、さながら蜜蜂の巣のように映ったと思われるのである。しかも、近年の室町住宅地に関する研究では、そのことに関する興味深い指摘がなされている。

室町住宅地は、日本における郊外住宅地の原形として位置づけられているが、実はその後の多くの日本の郊外住宅地とは大きく異なる特徴がある。それは、住宅地のほぼ中心部に呉服神社という神社があり、これを中心に市街地が形成されていることである。(略)呉服神社は、呉の国から日本に渡来し、機織技術を伝えたとされている織姫、呉服媛を祀った古社であり、古くから信仰を集めていた。<sup>(22)</sup>

このように、まちの中心部に「媛」を祀る神社があったことで、ますます女王蜂が鎮座する巣のように、池田の新しい街が見えてしまふ。むろん、池田の地理に暗い一般読者が、そこまで気づくことは難しいであろうが、その地に在住し、古神道の研究者でもある泡鳴が「呉服神社」について知らないはずもなく、そこまで織り込んだとみるほうが妥当である。室町住宅については同時代的関心事ゆえ読み外すわけにはいかないが、呉服神社については、気づく人にだけ届けられた意匠なのであろう。

この住宅地から、耕次のような会社員が電車に乗って職場に行き、そして電車に乗って帰ってくる。彼らが暮らす室町住宅は、まさに都市で働き、郊外に帰ってくる「〈蜜蜂〉の家」なのである。とすれば、本作は、単に耕次と澄子の、特殊な恋愛事情が語られた

小説というより、さらに広く、新しい時代の生活の有様が写し出されていた点に文学性をもつ作品であったのではないだろうか。「蜜蜂のやう」なのは、耕次と澄子の二人のことだけを指したわけではないのである。

本文の引用に戻ると、澄子は、あらためてこの地を「いいところですよ、わ」と思っている。これは、初めて池田の家に来た時に発した「いいところですよ」と明らかに対応関係にある。<sup>(23)</sup>一方の耕次はどこか冷めていて、「早く帰宅して蜂の働きをでも見てみる方がまだくまし」などと考えはするものの、天然に触れた彼女の気分がよいことに乗じ、この場で彼女と和解を果たす。下山の途中、禅寺の前を通るが、もはや迷いのなくなった彼らが立ち留まる必要もなく、そのまま下山した。夏目漱石の『門』(明治44・1、春陽堂)的一幕を意識させる場面である。

そして、「秋の中ごろの景色になつた時」、耕次たちは近所の空に鶴を見かける。

こないだ自分らが登つて見て二度とはない徒ら気を起した池田山をすり鉢の底として、そのずつと上のそらへ無形の周囲とふちとを広げた大円をえがいて、二羽の鳥が遠くかけ離れて両方から鳴きかはしつつ、大きくゆつたりと飛んでゐる。自分にはそれがよそごとではなかつた。それも鳥も、またその底なる山も皆、自分なる緊張生活者のものになつてしまつて、渠はかの女に禅僧の如く無言の微笑を以つてそのつがひ鳥の数と同じだけの指を出して見せた。

『およしなさい、』と、かの女はそれをひらてでよこにはたきのけた。その時のかの女には不断のいやな気取りも高尚ぶりも見えなかつた。ただ恥かしかつたやうにこちらを見る視線が乱れながら、『あなたも随分ひどい、わ。』

『……』渠はたださう聴いただけでもけふの空の如くいつに無い天空海潤な一種の征服欲を満足させた。

このとおり「大円をゑがいて」「二羽の鶴が飛んでいたの、」自分にはそれがよそごとではなかつた」と感じられている。泡鳴言うところの「征服」が完成したところで、作品は大団円へと向かっていく。

## 五

その後の後日談として、「八」がある。懸案であつた妻との離婚が成立し、耕次と澄子の二人は、再出発の準備が整う。

兎に角、随分長い間の一問題が解決したし、養蜂のこともいよく、独り立ちでやつて行けるやうに思へて来たので、『これを機会に東京へ帰らうか』と、渠はかの女の意を探つて見た。

ところが、澄子は「この地に於いて新らしく得たところの恋愛の記念物——そのうちには鶴もあらう、やま川もあらう——に執着し初めたのであつた。」とされ、作品は終わる。かように、実質的には「七」で終了しているにもかかわらず、「八」まで引き延ば

されていることをどのように受け止めればよいのであろうか。

やはり末広がりな結末を、構造としても表現していることなのであろうか。見てきたとおり、本作には、要所で幸運や吉兆を示唆する生物が配置されており、それに沿う形で、物語が収められている。「八」と「蜂」も音でつながっている。このような連想が許されるのであれば、「一」で澄子が大切そうに抱え、なぜか山にも持参していた「かうもり傘」と「ステキ」も、それぞれ傘寿と針とを想起させ、「蜂」に関する縁語として、本作を支えていたと読み取れる。

以上で見てきたとおり、本作では、耕次と澄子の姿が「蜜蜂のやう」だと評され、当時の一般的な男女関係とは異なる恋愛像が描き出される一方、さまざまな事物から連想されるイメージ、とくに蜜蜂がもつ社会性のイメージは巧みに利用され、職住分離が進みつつあつた近代において、郊外と職場を行き来する人々もまた「蜜蜂のやう」であることが示唆されていた。蜜蜂の巣のごとき「池田の室町」はまさにそのことを象徴する場所であつたのだろう。本作では、全体的に、耕次と澄子の愛憎劇を軸に、近代社会で生活することの軋轢が書き込まれているが、それも、自然と都市機能の両方を併せ持つ郊外が解消させる形になっており、郊外への同時代的な期待感が色濃く反映された作品であつたと言えるであらう。

## 注

- (1) 宮島新三郎「大正八年の文壇を論ずる書」(『文章世界』、大正8・12)
- (2) 泡鳴が再婚する婦人活動家の遠藤清は、本作における澄子のモデルであるが、遠藤清の研究史においても、本作を分析的に読解する試みはなされていない。なお、「蜜蜂の家」の風景の描かれ方については、佐藤泉「観察者の個人主義―岩野泡鳴「均質な風景」の棄却」(『国文学研究』、平成11・3)において、多少言及されている。
- (3) 蜜蜂に関する泡鳴の文章は、「蜜蜂の家」以前に、「詩人の養蜂日記」(『趣味』、明治45・7、大正元・10、大正元・11)、「蜂と人」(大正2、初出未詳)、「蜜蜂の話」(『婦人評論』、大正2・5)、「蜜蜂の話」(『中央公論』、大正4・5)などがあり、断続的に随筆や評論の題材とされてきた。なお、「婦人評論」の「蜜蜂の話」は、全集未収録の作品であるが、付記に「(大正二年四月六日、庭の蜂群がいづれも桜の花粉や椿の蜜を取つて来るのを見ながら。)」とあり、一方で「目黒日記」には、「四月三日。(略)「蜜蜂の話」(十四枚半)、婦人評論の爲めに。」とあるので、この三日間で執筆したものと考えられる。
- (4) 旋風子「文芸問語」(『趣味』、大正元・10)には、「泡鳴の養蜂熱」の小題のもと、次のとおりある。  
此頃の養蜂熱は実に盛んなもので、今度東京へ箱を全部持つて来るさうだが、文壇の人々に誰かれの容赦なく、説き付けて、皆に蜂を飼はすようにすると云つてゐるさうだ。珍しいもの好きの文壇では歓迎せられる事だらう。
- (5) 拙稿「新温泉に行く大阪の坊っちゃん―岩野泡鳴「ほんち」」(稿本近代文学』、平成28・3)を参照されたい。
- (6) たとえば、当時の『読売新聞』には、次の記事が掲載されている。  
「征服被征服」の会 岩野泡鳴氏の新著の為に白鳥、乙字、馨一、倍紀知、林儀氏等発企となり五日午後五時半ミカドに於て「征服被征服の会」を開く筈。(大正8・7・1)
- (7) 「征服被征服の会」は著者岩野泡鳴氏のために去る五日夜ミカドで開かれた。集り会する者六十余氏、主賓岩野夫妻を初め、秋声、小剣、臨川、星湖、(略)他といふ盛んな会であつた。(大正8・7・13)
- (8) 同書に付された「はしがき」には、次のとおりある。  
この長編小説を組織する四つの巻は一たびそれぞれ別々に前後して発表されたものだが、その孰れも、ただ一つの事件若しくは生活の変化した部分たるに過ぎなかつた。今やここに合巻されて一長編となつたのは自然のことで、『征服被征服』の名は一の巻にのみではなく、四つの巻全体に渡つてゐるのである。
- (9) 加藤朝鳥「岩野泡鳴論」(『文章世界』、大正8・10)
- (10) 宗像和重「解説・解題」(『岩野泡鳴全集 第四巻』(平成7・4、臨川書店))
- (11) 大月隆仗「解説的に」(『征服被征服 岩野泡鳴選集 第二巻』(昭和24・2、三興書林))
- (12) 「蜜蜂の家」の本文引用は、「雄弁」(大正8・4)に掲載された初出に拠つた。なお、旧字は新字に改めた。以下、すべて同じ。
- (13) 岩野泡鳴「予が本年発表せる創作に就て」(『新潮』、大正7・12)。なお、引用中の「※」は、論文執筆者による注。
- (14) 岩野泡鳴「理解力の不足だ」(『読売新聞』、大正8・1・18)
- (15) 岩野泡鳴「予が本年発表せる創作に就いて」(『新潮』、大正8・12)
- (16) 泡鳴の作品には、池田とともに箕面有馬電気軌道株式会社が開発した別の住宅地「桜井住宅地」を舞台とする小説「郊外生活」(『新日本』、大正2・9)もある。「ほんち」(『中央公論』、大正2・3)にいたつては、箕面有馬電気軌道そのものが舞台になっており、同社と泡鳴との関係については検討の余地があるように思われる。
- (17) 作者泡鳴は、当時池田在住であつた小林一三と親密な関係にあつたようである。『続池田日記』には「九月十二日。小林氏に電軌会社で会ひ、約束の六十円を受け取つた。その時の話に、氏は君は失敬な人だと云ふ。何かと聴くと、きのふ熊蜂を退じたが、あれは幸の神として縁起がいいことにしてあつたのだ。然し退じてしまつたら仕方ないがとのことだ。」との挿話が見え、これが本作では、多少変化した形で語られている。
- (18) 拙稿「芥川龍之介「秋」考察―(松林)のある「大阪の郊外」について」(『阪南論集 人文自然科学編』、令和2・3)を参照されたい。
- (19) 渡辺孝「ミツバチの文学誌」(平成9・5、筑摩書房)には、次のとおりある。  
アメリカからデータントの「巣箱とミツバチ」The Hive and the Honey Beeを取り寄せたり、ヨーロッパからメーテルリンクの「蜜蜂の生活」La vie des Abeilles (たぶん英訳)を取り寄せたりして、

(19) (略)彼の知識水準は当時としては群を抜いている。「玉突界雑事」(『東京朝日新聞』明治42・2・6)には次のとおりあり、泡鳴自身が玉突き愛好家として知られていた。

▲文士連中で玉突きをやるのは若野泡鳴、正岡芸陽、押川春浪君などが何れも百内外の所▲徳田秋声君は湯河原でチヨイと稽古をした以来大分面白味を感じたらしい

(20) アサ・シモンズ著、岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』(大正2・12、新潮社)における「訳者の序」では、シモンズの詩を評しつつ、次のとおり語られている。

すべて言葉の意味が表面に終つてゐない。そうかと云つて、その暗示するところは言外にかけ離れた理想や概念でもない。言葉に即しないで而もことは離れない内容をいのちとしてゐる。これが表象主義の発想の特色であつて、僕等はこれを小説にも主張して来たのである。

(21) 図版は、阪急文化財団池田文庫より借用させていただいた。

(22) 鈴木勇一郎「小林一三と郊外開発」(『日本歴史』平成22・9)。なお、同論文では、「小林とその事業には健全で清潔な中産階級の郊外ユーニアというイメージが定着している」との指摘もある。

(23) 土井勉「地域計画策定のための地域イメージの構造分析に関する研究」(平成9・1、京都大学博士学位請求論文)には次のとおりあり、本作も、郊外という場に付与された、同時代のユーニア構想の延長線上にあつたものと考えられる。

ハウードの『田園都市論』が出されて9年後の1907(明治40)年にはわが国においても、当時の内務省地方局有志による『田園都市』が出版されている。こうしたいわば、(田園都市ブーム)を背景として郊外住宅地が生み出されたのである。

(二〇二一年七月十六日掲載決定)